

体験から学ぶ

くらぶち英語村 村長 高橋 秀郎

“Good Morning!!”

朝6時、太陽が昇る東の山に向かって大声で叫ぶ、やまびこ挨拶と、英語版ラジオ体操で「くらぶち英語村」の子どもたちの1日が始まります。くらぶち英語村は、高崎市の中心部から北西へ30キロメートル、標高570メートルの倉渚町川浦地区に位置し、近くには烏川からすがわの清流、裏手には浅間あさま隠山かくしやまなど雄大な山並みが続く、自然環境豊かな所に在ります。

ここには川浦小学校があつたのですが、過疎化が進み子どもの数が減ったことなどから、10年前に倉渚町の3校が合併し、廃校になりました。川浦地区から子どもたちの声が聞こえなくなつたことや姿が見られなくなつたことから、何かできないものかと、高崎市長、公益財団法人育てる会、倉渚町で検討され、2018年4月に「くらぶち英語村」を開村しました。

設置目的は、

1 小学生も英語が必修科目になったことや、グローバルな時代を生きる子どもたちに、生きた英語を学ばせる。

※平日は、地元の学校に通学し、学校から帰ってきたら、ネイティブスタッフと育てる会の指導員（全員英語が話せる）と食事や清掃など日常生活時は英語で会話をする。

※土日祝日は、ハイキング、キャンプ、農作業、レクリエーション活動などを行うが、その際もスタッフと英語で会話する。

2 自然と触れ合って、自然の厳しさや、恩恵を感じる。

3 田んぼでの米作り、畑での野菜作りなどの農業体験を通して、食物への感謝の心を培う。

4 掃除洗濯など「自分のことは自分でする」。責任感や自主性を育てるとともに、異年齢での集団生活を通じ、思いやりの心や協調性を培う。

などです。

子どもたちの英語村での生活は、朝5時50分に起床、朝の集い、清掃、朝食をすませ、小学生は7時に登校の出発。4キロの道のりを1時間かけて徒歩で通学します。中学生は毎朝30分イングリッシュタイムを行い、6キロの道のりを自転車で通学します。行きは下り坂なので20

分程度で着きますが、帰りは上り坂なので途中で押し歩きし、1時間かけて帰ってきます。学校から帰るとネイティブスタッフと生活指導スタッフと英語で生活します。ここでの英語は、ばんしょ板書で教えるのではなく、食事するときや清掃のとき、登山・ハイキングや農作業のときなど、日常の生活の中で耳から「生きた英語」を習得します。

「育てる会」の中では常識ですが、子どもたちはパソコン・スマホ無し、テレビ・ラジオ無しのノーマディアの生活をしています。保護者の皆様も授業参観・運動会など学校行事や年に2回から3回の英語村での行事以外は来れないので、子どもと会うことができません。保護者との連絡は葉書・手紙でしか取れません。大方の子どもと保護者は週に1通くらいやり取りしています。この様な生活をしている中、子どもたちの成長には驚かされます。4月に入ってから最初は英語を聞き取ることも、勿論話すこともできないのですが、2ヶ月くらい過ぎると聞き取ることができるようになり、かたこと片言の英語も話すようになります。生活面でも、掃除・洗濯や食事の配膳・後片付けなども手際よくやれるようになります。

子どもたちの順応力じゅんおんのりよくには、感心させられます。私は以前に、国立青少年自然の家に勤務していました。その時も子どもの想像力に驚かされたことが、いくつかありました。早朝、小学低学年の子どもが私にかけ寄って来て「先生、僕さっき空気を見たよ」と興奮気味に話してく

れました。何のことだろうと話を聞いてみると、その日は薄い霧が出ていました。風がゆっくり吹いていました、その風に乗って霧がゆっくり流れている様をみて「空気が見えた」と表現したのです。大人にはでてこない、子どもならではの感性だと感心させられました。

本年は日本が、世界が、新型コロナウイルスに振り回されています。くらぶち英語村は関東圏をはじめ、北海道から兵庫県までの子ども達が生活しているので、ここ倉渕地区の方々には多大な心配やご迷惑をお掛けしていますが、子どもたちが通学する際などには「頑張れ ガンバレ」と励ましの声をかけてくれます。その優しさに子どもたちも職員も心から感謝しています。私は、人が成長していくには、体験・経験して学んでいくことが重要だと思っています。「くらぶち英語村」の子どもたちは、ネイティブ等との英語体験・自然と触れ合う体験・田んぼ畑での農業体験・共同生活体験・地域の皆様の優しさに触れる体験などを通して「人間力」を身に付けて、グローバルな時代に大きく羽ばたいて行くことと期待しています。

たかはし・ひでお.....

国立青少年自然の家・体育進学センター勤務を経て、現在は、くらぶち英語村村長。